

大好きで憧れの韓国

高橋 茉愛（北海道千歳高等学校）

私は中学一年生の時に友達に勧められて観た K-POP 以来、韓国が大好きで、映画やドラマを観たり、音楽を聴いたり、毎日韓国ばかりの生活です。そんなただの韓国好きの私ですが、最近大きな変化がありました。それは将来韓国で仕事をしたいという夢が出来たことです。いつからか実際に自分の目でみて肌で感じたいと思うようになり、いつの間か驚くほど韓国に憧れを抱いていました。そして一昨年より韓国語の勉強を始めました。言葉を勉強することが何よりも大切だと思ったからです。又、海外へ行くなら自分の国のこともしっかり勉強しなければならぬと思いました。過去に交流事業を通して何度か海外へ行った経験があるのですが、その時日本語が使えなく、英語もままならず頼れる人がいない環境で、「どうやったら自分の思いを上手く伝えられるか」を考える毎日でした。外国人が思う日本の認識、日本人が思う海外の認識はすれ違っていることがしばしばあります。やはり自分が自分の国のことをしっかり理解している事と相手を受け入れる気持ちがなければ分かり合えないことが分かりました。間違った情報を伝えるのは相手に失礼なので、韓国へ行くときは日本のことを沢山伝えてあげられるように、より一層勉強しようと思いました。そして高校一年生の夏にチャンスはやってきました。私の通う北海道千歳高等学校で毎年行っている韓国・ソウル市立空港高等学校との交換留学です。私のクラスには 3 人来ました。初めて韓国の方と会話して、初めて韓国の友達が出来て、彼らとの交流でもっと韓国が好きになりました。そこで少しだけですが日本の事を伝えることが出来ました。私のつたない韓国語を一生懸命聞いてくれて私自身恥ずかしい思いをしながらも本当に嬉しかったです。これらの経験で感じたことは成功も失敗も恥ずかしいこともどんな事でもチャレンジ精神をもって積極的に取り組み、自分に向き合うことが大切だということです。将来絶対に韓国へ行き、自分の目標に向かって誰にも頼れない環境の中で沢山の事を吸収していきたいです。

韓国は日本と関係が悪いとよくニュースで見たり、聞いたりします。ですが、実際に関わってみたり、話してみたり、その国に行ってみないとわからないことは沢山あります。各々が互いの国について意見を言い成長し合える良い関係になるようずっと願います。

思い出いっぱい胸いっぱいの韓国旅行

中里 恵（大妻多摩高等学校）

私には夢がある。それは旅行会社に勤めてソウル在住のツアーデスクになる事だ。日本から韓国を訪れる人達に、私の大好きな韓国の魅力を伝え、思い出のたくさん詰まった旅をして欲しいと思っている。私がそう思ったきっかけは、昨年秋に母と2人で初めてソウルを訪れた時に、目的地がわからず困っていた私達に沢山の韓国の人達が親切に接してくれた事—そしてその思い出がキラキラと今でも私の中に残っているからだ。

時は9月、まだ残暑の厳しいソウルの街で私は大好きなアイドルグループの事務所を見たい一心で、SNSの情報片手に歩いていた。しかしそこは住宅地で、看板も目印もなく同じ坂道を行ったり来たり途方に暮れていた。通り沿いに小さなコンビニを見つけて店に入ると一見気難しそうなご主人が。私は片言のハングルで勇気を振り絞って「すみません。この辺りにある事務所を探しているのですが」と尋ねた。「何の事務所？」「アイドルグループの事務所です」「ちょっと携帯みせてもらっていい？」と私の携帯を見ながら自分の携帯で色々調べだしたご主人。何と事務所に電話をかけて色々聞いてくれている。3分ほどの電話の後「最近移転したみたいだね。新住所を聞いたからこれを見て行ってごらん」と紙に書いて手渡してくれた。隣では奥さんもニコニコして見守ってくれていた。その紙の住所を頼りに、タクシーで無事に事務所にたどりつけたのだった。

そして夕方になり忠武路3街駅でホテルが見つからず、また右往左往していた私達。オフィスビルの前で背広姿の小太りなおじさんに「Holiday Inn Expressはどこですか？」と尋ねると他の方に聞いてくれて、3つめの通りを右と教えてくれた。「地図で見るとそんなに離れてないのだけだなあ」と首をかしげながら歩き出してしばらくすると、後ろから「Excuse me!」と叫ぶ声が。先程のおじさんが、汗をかいて走って追いかけてきてくれて「さっきの方が教えてくれたのはHoliday Innの方でしたよ。Expressはすぐ近くです。一緒に行きましょう」と言ってくれた。他にもチキンのお店でハングル上手だね。留学生？とほめてくれた店員さん、ドーナツ屋で、日本の事教えてと話しかけてくれた女性、私にとってますます韓国が大好きになる、感謝と感動で胸がいっぱいの旅だった。

私は、その国の印象はその国の人の持つ優しさで作られると思う。日本と韓国の未来を担う若い世代がお互いに、偏見や先入観抜きで、一人ひとりの草の根の視点で困っている人に優しい気持ちで接してゆけば絶対にお互いわかりあえる。その若い力が、韓日関係を変えていく大きな力になると信じている。

そうすれば、韓国と日本は文化・風習・考え方など沢山の似ているところを見つけられるはずだ。この夏も韓国を旅する私、またどんな新しい出会いが待っているのかなと胸をドキドキさせているこの頃である。

私が考える韓日交流

鄭 元竣（上智福岡高等学校）

私は在日韓国人です。私は日本で生まれ18年間日本の教育を受け、小学生の時まで私が在日韓国人という自覚が無かったけど、中学生になった時、私が在日韓国人だと自覚しました。クラスメイトと口喧嘩をしたらクラスメイトがあたしに「母国に帰れ、在日」など言われるからです。その時は何も返す言葉がなくて「うるせー」など笑って返していたけど、内心は相当傷付きました。何故日本で生まれたのだろ、もし韓国に居たらこんなことを言われずに済んだのだろうか？など考えたこともあります。しかし何故私がこのようなことを書こうと思ったのかを今からお話したいと思います。

去年私がたまたま韓国のテレビを見ていたら軍艦島について番組があったので軽い気持見ていたら、実は韓国人が強制労働させられていたことを知って驚いたことを今でも鮮明に覚えています。軍艦島がユネスコに登録する際日本が強制労働を認めることで登録したのに、登録し終わって日本政府側は「forced to work」は強制労働の意味は無いと言った。

その当時軍艦島で働いていた人がしゃべっているのをテレビで見たがそれはあまりにひどい環境の中で働かされたと聞くと同じ韓国人として胸が痛みました。

日本は最近グローバル化しなければならない、とよく聞きますが、グローバル化はどんな意味だろうと思って調べてみると「社会的あるいは経済的な関連が、旧来の国家や地域などの境界を越えて、地球規模に拡大して様々な変化を引き起こす現象である。」と書いてありました。国境を超えるためには英語ができればいい、よくみなさんは思いますが、僕は違うと思います。ぼくが思うグローバル化はお互いの文化や歴史をよく知ることだと思います。友達に「韓国のイメージってどんなの？」と聞いてみるとあまりよくないと答える人が大半でした。実際韓国人は悪い人ばかりではなくいい人もいるということを知るよう韓国と日本の懸け橋になる人になれたらいいと思います。

私が考える韓国のイメージ

永長 澄音（洗足学園高等学校）

私は小学生の頃から大人数で喋ったり騒いだりするのが苦手だ。小学校に通っていた当時、女子はいくつかの仲良しグループに分かれていた。しかし私はそのどれにも属していなかった。自分と同じように浮いている人と、少しだけ話をするのが好きだった。

そんなちよっぴりの友達の中に、S という子がいた。S は日本人と韓国人の血を引いていた。外見にはこれといって変わったこともなかったし、本人に聞くまで S の母親が韓国人であるということは知らなかった。しかし S は周りとあまり馴染めておらず、韓国語を話してみろよなどと男子らにからかわれていることもあった。

私ははじめ、ほんの興味から彼女に話しかけた。勉強は得意ではなく、走り方の面白い子だった。少し変わったところのある子なのかなとも思ったが、大勢で派手に騒いだりすることを好まない、私に似ている子だった。

ある日、彼女の家遊びに行った。お互い友達と家で遊ぶということは珍しく、不慣れながらも楽しい時間を過ごした。彼女の部屋には男性の顔写真が掛かっていた。何の気なしに、誰かと聞いた。

「あ、あたしのパパ。死んじゃったの。」

——戦慄が走った。幼い私には全くそういう発想がなかった。そんなにも近い人を失うことがあろうとは…彼女は日本人の父親を亡くし韓国人の母親と二人暮らしをしていたのだ。

衝撃を受けた私は、それから S についていろんなことを考えた。韓国という国からは、その時歴史を学んでいるところだったからか、戦争・暗黒・苦痛というイメージが連想された。しかし S はそんな雰囲気や微塵も纏っていなかった。S の母親は日本語を話すのは難しそうだったが、カラッと晴れ上がったような笑顔が印象的な人だった。S 宅の訪問がきっかけで、私は先程の考えが全く間違っただけだと気づいた。また、S は家でも日本語を話すけど、母親は韓国語を話すのだと言っていた。お互いの言葉を話すことはできなくても、ちゃんと理解して、通じ合っているのだと言っていた。

韓国と日本との間は海で隔てられている。しかし、自分のすぐ傍に、2 つの国の狭間で運命に揺られている人がいた。ただ海があるだけで、韓国はそれほど遠くないのかもしれない。韓国からやってきた S の母親のように、韓国にはきっと力強く生きている人がたくさんいるだろう。二ヶ国語の間でコミュニケーションをとれる S のように、日本にもきっと広く心をひらける人がたくさんいるだろう。

久しぶりに S のことを思い出して、私も日本に閉じ籠もっていないで韓国の「生命力」に触れたいという気持ちになった。

私が考える韓日交流

種田 桂倫（北海道千歳高等学校）

今、この世界にはたくさんの情報に溢れており、人それぞれ色々な捉え方をする。それによって誤解が生じることも多々ある。だが、このような誤解は、実際に自分が経験すれば考えが変わることが多い。昔から存在する「百聞は一見に如かず」ということわざも、まさにこれを表しているのではないだろうか。

今までにそのような経験をしたことがある人は、どれくらいいるのだろうか。私は韓国の高校生と交流する機会があり、それによって自分の考えが大きく変わった。その事についてこのエッセイにつづりたい。

私は北海道のある公立校に通っている。国際教養科に通い、異文化理解という授業を通して外国の歴史だけでなく、自分が外国を訪れるときに感じるカルチャーショック、国それぞれにそれぞれの考えや背景があり、それによって人との接し方が変わってくるなど、まさに異文化を理解するための授業を受けてきた。さらに私の学校は韓国に姉妹校があり、毎年夏に1週間ほど韓国の生徒と交流する時間がある。私が実際に韓国の人と交流するのは、一昨年の夏が初めてだった。韓日の中で様々な問題がある中、実際に韓国の生徒と触れ合って大きく感じたのは1つ、韓国の生徒も、日本の生徒も、だれもお互いのことを憎んでいない。私たちがニュースで目にする報道は事実だが、そうでない人も多くいることを、身をもって感じる事ができた。

彼らとはたくさんの事を話した。学校はどうか、K-POP が好きな生徒はそれぞれ好きな話題で盛り上がっていた。私にとって、とても刺激的な時間であり、考えを変えることができた大きな出来事の1つでもあり、この先生きていくなかで、プラスになる経験だったことは間違いない。

そこで私は、ニュースや報道を見て自分の考えを流されてしまい、特にこれといった理由もなく韓国を好きになれない人が少なくなる方法はないか考えた。今はインターネットという便利なツールもあり、自ら色々なことを調べることができる。だが、それでは自分の考えが変わるとは言えない。とても難しい事だが、私は一人ひとり全員が実際に交流するのが1番だと思っている。なぜなら、自分が実際にそうだったから。

だが、全員に同じチャンスが与えられているわけではない。さらに、韓国に対していい感情を抱いていない人が、本当に会って交流することができるのであろうか。答えはきっと否だ。では、どうすれば良いだろう？全員に、自分の考えは捨て広い心を持ち考えを変えてみろなどと強要はできない。動くべきは、考えが変わった経験をした自分達である。自分達が自らの口で、悪さも含め、すべての事実を話した上で、自分の考えを素直に相手に伝えるのが1番であろう。プラスの意見を聞くことができる。大きく考えが変わらなかったとしても、両方の意見を知っておくのは悪いことではない。小さいことではあるが、大きな一歩になるだろうと私は考えている。

好きになれる

布川 遥香 (YICS)

「あなたにだって韓国人の血がながれてるのよ。」

私の韓国人に対するイメージが変わった母からの言葉です。私は、韓国人と日本人の間に産まれたハーフです。しかし、産まれてから今までずっと、日本に住んでいて、韓国には旅行に行くぐらいの、ほぼ日本人として育ってきました。

私が小さいころは韓国人に対して、それほど良いイメージを持っていませんでした。理由はたくさんありました。大胆で、自由で、周りを気にしない所、その中で私の頭の中で根強く残っていたイメージが「声」が大きいところでした。この「声」は物理的な意味もありますが、自分の思ったことをズバズバ何でも言える、そういう意味も含まれています。電車の中で普通に友達と話をしていたり、授業中、他人の意見を聞かずに自己主張が激しかったり……。

しかし、それがいつしか「声」が大きいということは、自分が今ここにいて、ここで生きているという存在証明、一人の人間として生きているという意味に変わっていきました。

こんなにもイメージが変わった理由は、いま通っている学校のおかげです。私が現在通っている学校は 9 割韓国人の学校です。この学校で言語の問題にぶつかる……といったことはありませんでした。日本にある学校なので、生徒は皆、日本語が使えて、先生も私には日本語を使ってくれました。そのときは、まだ韓国人に対するイメージはそれほど良くはなかったと思います。人に合わせるという、日本人の特徴が、ここの学校では通用しなかったのです。私には周りの友達が皆、自分に自信があり、自分の意見がしっかり言える、ナルシスト人間に見えました。でもその一方で輝いてるようにも見えました。周りとあまりにも性格が合わなくて、私の心が爆発しそうになり、母に相談をしました。私が期待していたのは、優しい言葉でしたが、そうではなくて、母は怒ったように「あなたにだって韓国人の血がながれてるのよ。」と言いました。「母が韓国人だから嫌な気分になったんだ。」と思いましたが、その後に母に、「あなたがマイナス思考で考えてるからでしょ？ そこがあなたの悪いところ。」と言われ、その次の日から徐々に韓国人に対するイメージが変わりはじめました。友達が私にきつく当たるのは、私をどうでもいい人間だと思っていないから、今自分の思ったことを言わなければ後悔するから、そんな風にとらえ始めました。

今は韓国人も日本人も大好きです。人間が好きです。どの国の人も、長所があり短所があり、短所が実は長所だったりするんだと思い、自分の目から見ただけでその国のイメージを決めてはならないと思いました。いや、決めてはならないのです。自分の目に見えるものがすべてではないと、いろんな視点から見なくてはいけないと、私は周りに伝えていきたいです。

これから先もきっと

真野 弘子（東京都調布市）

人生の分岐点は？と聞かれば、私は間違いなく「2011年に、韓流にハマったこと」と答えるであろう。これから先、何があるかはまだわからないが、私が韓国文化に出会ったことは人生でも一、二をあらそう重要な分岐点であろう。

私は大阪府生野区出身だ。在日韓国人の多い地域だったので、学校の授業や友達の家族など、韓国や韓国人は近い存在であった。しかし、それだけに韓国はただのお隣さんでしかなく、特別興味が湧くということはなかった。22年もの間生野区で暮らし、2004年には冬のソナタブームが来たにも関わらず、ただの一度もなかった。

そんな私が韓流に目覚めたのは、いまから約五年前のことである。故郷を離れ、東京で独り暮らしをはじめから三年ほど経った頃だった。声優になる、という夢を追いかけて東京に出てきたが、なかなかデビューできない現実に嫌気を感じ、夢を諦めて大阪に戻ろうかとしていた時期でもあった。

きっかけは一曲の歌。一曲聞いて一気にその歌手の虜になった。私を虜にした素晴らしい歌声の歌手は、驚いたことに韓国人で、日本と韓国をまたにかけ、歌だけにとどまらず演技の世界でも活躍していた。彼の出演するドラマを見てまた驚いた。そのドラマの面白いこと！！日本では「いやいや、やりすぎでしょ」と思われることをいとも簡単にやってのけ、笑いに転換し、ワクワクさせてくれたのだ。2004年にやってこなかったブームが、後れ馳せながらやってきた。

私の中の韓流ブームは二つの恩恵を与えてくれた。ひとつは、韓国語を勉強する楽しみ。元々無趣味でこれといってやることもなく、隙をもて余しぎみだった私にとっては、またとない趣味となった。その上、韓国語の勉強は様々な人と出会わせてくれもした。人にはいろんな生き方があって、人生楽しんだもの勝ちだ、可能性は無限大に広がっていると思えた。恩恵のもうひとつは、新たな夢である。韓流ドラマを見るうちに、自分で吹き替えしたいという目標ができたのだ。自分が吹き替えたドラマで、面白さを伝えられたらどんなに素敵かと思うようになった。実のところ、上京したての頃は声優になる、という漠然とした夢はあったが明確な目標はなかったのだ。しかし、ブームのお陰で今はハッキリとした目標ができた。韓流ドラマの、コメディを吹き替えて、もう一度韓流ドラマの面白さを再認識してもらいたい。それをきっかけに韓国に興味を持つ人が増え日韓のなかがもっと深まればさらに良い…といった具合に。

いま私は韓国語を学びながら、声優としても努力している。目標はまだ達成できてはいないが、デビューを果たし少しずつではあるが夢を実現している。

あのとき、私の中の韓流ブームがなければ、夢を諦めた面白味のない人生を歩むことになっていただろう。私にとって「韓国」はまさに、人生の分岐点そのものなのである。

私の心の中のメガネ

明内 亮雅（武蔵野大学）

メガネをつけていては、見えないことがある。それが景色であると、私の父はよく口にした。たいしたホラ吹きだと思う。ご飯を食べる時も、自動車の運転をする時も、最近では漫画を読む時ですら、父はメガネを欠かせない。しかし、そんな父が何故か、故郷の岩手に帰り、そこにある山や海を見つめる時に限って、メガネを外し自慢げに私に言うのだ。

「メガネなんて外せ。色んなものをちゃんと、自分の二つの眼を開いて見ろ」

元から裸眼の自分には、父が何を言いたいのか、つい最近までわからないでいた。

一枚の写真、それは韓国の牙山市にある地中海村という場所を写したものだ。夕方の情報番組で特集されたその写真を見て、胸を突かれた様な衝撃を受けたのを今でもはっきりと覚えている。まるで、水彩絵の具を垂らしたような、澄んだ青色をした屋根と真っ白な壁で作られた家々が見せる光景は、私に何かを訴えているようだった。

それまで自分が思っていた韓国という国は、正直に言えば、良いイメージではなかった。中学から好きだった歴史の授業は、私の韓国への形のない劣等感を作るには十分な環境だった。韓国の音楽が人気を博し、旅行をする人が増え、交換留学などが活発に行われるようになった今でも、どこか心の中に線がある。それが、私が感じていた日本と韓国の関係であった。旅行に行きたい場所とは聞かれれば、スペインのサグラダファミリア、アメリカのグランド・キャニオン、フランスの、と出てくるのは遠い世界ばかり、隣の国さえも上手く見えない。その国が持つ美しさも、文化も、人々も、何もかも、この日本という国からでは見えづらい。

私が隣の国さえも、ちゃんと見えなくなってしまったのは何故だろうか。大国から飛んできていると言われている、お騒がせの黄色い砂のせい。それとも、船を使えばすぐにでも越えられるような海のせい。きっとどれも本当の答えではないのだろう。自分自身が勝手に、大事なものの様にしている日本人としてのメガネが、すぐ近くにあるはずの美しい国すら見えなくしているだけだ。そのことに気づいてしまったから、あの写真を見て、美しいと感じた自分に衝撃を覚えたのだろう。

この場所に行ってみたい。そして、こんな景色を作る人たちのことをもっと知ってみたい。その衝動こそ、父の言っていたことなのかもしれない。メガネをつけたままでは、その景色の本質は見えないし、ぼやけてしまう。私が見ようとしていなかった景色は、思ったよりも、ずっと澄んでいて、ずっと側にあった。これまで積み上げてきた自分の想いが、すぐに変わるとは思えないが、これから積み上げていく想いは、もっと純粹でありたいと思う。

そうだ、この言葉から始めよう。

「안녕하세요?」

メガネを外すチャンスなんて、私の想い一つなのだ。

光の未来

田中 葵（日本女子大学）

授業のない時間に学校の廊下を歩いていると、とある掲示が目に入り、ふと足を止めて私はそのプリントを手にとった。——今回の応募に至るまでの経緯である。

来る3月、私の大好きな祖父がこの世を去った。今でもふとした時に胸が締め付けられ、悲しい事実を受け入れることができず、どうしようも無くなってしまうことがある。祖父の最期は、身体中の至るところを蝕まれ、改善の余地があるとは言えない状態であった。しかし祖父は弱音を吐く様子を決して私たち家族に対して見せずに、自身の治癒力を信じて痛みと、そして自分自身と常に闘っていた。

祖父に“教わる”ことが好きだった私は、祖父と共に過ごす限られた時間に、大学で習っている韓国語を習うことに決めた。祖父は韓国語が得意であったのである。祖父は座っているのもやっとならぬにも関わらず、痛む体に無理を強いながらも、私のために時間を割いて一生懸命教えてくれた。

私が韓国語に興味を抱くことがなく、授業を選択していなければ過ごすことのなかった時間……。

言語を学ぶことによって、韓国の歴史や文化に触れ、日本との深い関わりがあることを知り、一層興味が深まったように感じられたのは勿論、韓国語を習うことを通じて、二度とない祖父との共に過ごす時間がしっかりと私の心の中に刻まれたことが何よりの幸せだと思っている。——一度祖父と一緒に韓国に行くことが出来たらどれ程嬉しいかと思うが、今はもう叶わない夢である。

思いがけないところで繋がり、結びつく、言葉も食べるものもルールも異なる国と国。国際状況下における日本と韓国の関係を、一言で言い表すことが難しいと言える今日、変えられない歴史を基に新たな歴史を築いていこうとするには相当な覚悟が必要である。

しかし、国同士の付き合いという大きな枠組みで考えるのではなく、たとえ小さくとも人と人の関係を大切にしようと思う心が一人一人に芽生えれば、分厚かったはずの国境の壁はきっと崩され、気づかぬうちに心の壁も越えてしまっている——そういった望ましい未来への扉が、“今”開かれるべきではないだろうか。国を越え、人と人としての付き合いが生まれることによって、はじめて分かり合えることや通じ合えることがあるはずだ。

祖父は言っていた。「自分自身の幸せだけでなく、自分の周りにいる人の幸せを考えてあげられるような人になきなさい」と。

祖父と過ごしたかけがえのない時間が、未だわからないことばかりの私の人生に、光となって暗い道を明るく照らし続けてくれたように、国と国の関わりでなく、人と人の繋がりを大切にできる、思いやりのある社会が広がっていくことを強く願ってやまない。

そして、祖父に教わった多くのことを忘れずに、壁にぶつかることを恐れず、自分と向き合うことから逃げない強い心をもった人になることを、いつも空から見守ってくれているはずの祖父に誓いたいと思う。

されど・キムチ

岩内 京子（北海道小樽市）

もう30年も前の事だ。
動物性たんぱく質アレルギーがあり、肉はおろか、キムチさえ食べた事が無かった私が2年間ソウルで暮らした。
とにかく食べるものが無い。
母が持たせてくれた梅干も海苔の佃煮も底を尽き、ついに重症のホームシックに陥り心は限界に来ていた。
そんなある日、窓の外で賑やかな声がある。
覗いてみると庭に埋められた沢山のキムチのカメを囲んで
アジマ達が試食の真っ最中だった。
強烈な匂いと飛び交うハングルに圧倒されていた私を見つけた一人のアジマが手招きをした。
「アガシ！ チョグム ワヨ〜！」
すると周りにいたアジマ達も一斉に手招きをした。
恐る恐る近づいた私の口にキムチが入るまで数秒も掛からなかった。
アジマが指でつまんだキムチを私の口に入れたのだ。
初めて食べるキムチ。
しかし嫌ではなかった。
むしろ新鮮であった。
白菜とキムチヤンニョムの絶妙な絡み具合と程よい辛さが味覚神経を刺激した。発酵独特の香りが鼻に抜けた瞬間
「ご飯が欲しい！」とつぶやいてしまった。
「マシソ？」と聞くアジマに「チョンマル マシソ！！」
覚えてたのハングルを使ってみる。
さもありませんと言う表情のアジマ。
様子を見ていた周りのアジマ達も
「ウリチベ キムチド マシソ！」と次々と口に入れる。
気が付けば何種類ものキムチを手にしてた。

私の重症だったはずのホームシックなど、すでにぶっ飛んでた。
飾らない優しさのアジマ達と刺激的なキムチに救われたのだ。
その日を境に私の生活は一変。
キムチを食べ歩く楽しさを覚えてしまった。
宮廷から屋台まで、美味しいと聞けば何処へでも出掛けた。
かくしてキムチハンターと化した私はソウルでのほとんどの時間をキムチ探究に費やした。
そしてハンターが最終的に辿り着くのが、自分で作りたいシンドロームなのである。
時は流れ私は今、小樽の小さな町で無農薬野菜を作っている。
勿論、目指すのは極上のキムチ。
アレルギーがあるため野菜中心で、これまで生きてきたが、現在もすこぶる健康である。
それはキムチと言う健康食品の賜物だと断言出来る。
ヘタなサプリより遥かに優れていると思う。
懐かしい味は何かと聞かれたら迷わずキムチと答えるだろう。
あの時の、あのキムチ。アジマが口に入れてくれた人生最初のキムチの味を忘れる事は無い。
近年、キムチ冷蔵庫の普及で、土に埋められたキムチのカメを見る事は、もう無いのだろうか？
韓国の女性たちが魂を込めた伝統の味。土中でジックリ熟成されたキムチは人間が創り出した最高の滋養食と言える。
たかがキムチと侮る無かれ。
されどキムチなのである。

私が考える韓日交流

弘兼 秀紀（埼玉県東松山市）

昨年の6月のこと、私は定年退職を迎えたことを契機に、生まれて初めての海外旅行に旅立った。日本の旅行会社が募集した「韓国の世界遺産を訪ねる一人旅」と銘うったツアーであった。なぜ、韓国を旅行先として選んだのか、その時点では特段の目的意識もなかったように思えるが、今、考えると漠然とした何かに糸を引かれての旅立ちだったかもしれない。旅先では、色々と韓国の世界遺産などを見学して回ったが、車窓から見る景色や人々の生活も含めて、私の感性に映ったのは、日本と韓国との類似性・共通性であり、そのことは、私に一種の驚きと不思議さと新鮮さをもたらした。そして、以後、両国に横たわるこの <共通項>とは、何かということについて、私は少しずつ勉強を始めた。

帰国後、そこには、これまた生まれて初めての韓国映画を見るべく映画館に足を運んでいる自分がいた。「国際市場で逢いましょう」という名の映画であった。私は、この映画を見た感動をスマートフォンから韓国のドラマや映画を紹介しているサイトに次のように投稿した。

【南北離散家族再会の場面は、こころの底から沸き上がった感情が無意識下、身体を震わせた。1953年生まれ私にとって、日本でのおのれの人生の軌跡と主人公の苦難の歴史とを重ね合わせざるを得なかった。朝鮮戦争特需により両親が私をつくることができたかも知れないから。この映画を見てから、韓国と日本の歴史や日本の中の韓国、そしてなにより韓国人の愛すべく文化と生活、気質に触れたいと思う自分が生まれてきた。キムタクのドラマにも感動した。駐日韓国文化院でのイベントにも参加したりしながら、ノートにNHKのハングル講座テキストの単語などをいくら反復してもすぐに忘れてしまうので身体で覚えるべく書きまくっている。韓国を知ること、日本を知ること、自分を知ることであるとこの年にして初めて気づいた。】

私は埼玉県東松山市に居住しているが、毎週、通うスイミングプールへは、高麗川を渡って行く。そしてこの高麗川は、近隣の日高市や飯能市方面とも相通じている。その日高市において、高麗郡建都1300年事業が展開されていることを最近知り、先日、講演会にも出かけてきたところである。県立高等学校生徒達が異国の民族衣装を着て行列する姿や関連自治体と市民が総力をあげて高麗郡建都1300年を祝っている姿には、思わず涙せずにはいられなかった。そこには、渡来人をキーワードとした両国の<共通項>が脈々と地域に醸し出されていた。日本においての様々な事柄に関するキーワードを各々検索するならば、きっと日韓の<共通項>がかなりの割合でヒットするだろう。そして、日本という国家形成過程、あるいはそれ以前においては、<共通項>ではなく、むしろ「同一項」といったほうが妥当な時代があったのかもしれない。私は、この共通項をしっかりと学ぶことをもって日韓交流としている。

私の心に咲くムクゲの国の姿

佐野 純子（津田塾大学）

尹東柱の詩の中に、「六畳の部屋はよその国」という一節がある。私が彼の詩の中でも特に好きな詩のひとつである「たやすく書かれた詩」の一節だ。私はかつて、この詩の一節のような体験をしていた。それこそ私の家には私だけの部屋はないが、姉と私の部屋にある勉強机が私の異国だったし、中学校からの帰り道の空が異国だった。中学時代、友人関係に悩んだ私の逃げ場は私の中の異国、韓国だった。行ったこともない韓国の空を、夕暮れで赤く燃える工場の多い下町の空と重ねた。家に帰り、詩を編むとき、それは私の秘密の紀行文だった。そして今もこうして、私の心の素直な部分を紐解けば、異国へと心を飛ばす自分がある。ただ心の赴く方へ自分の将来を生きて行ってもいいのなら、私はきっと大切なふたりの友達と韓国をくまなく旅し、人々と言葉を交わし、韓国の自然を感じ、すべてを知りたいとわがままを言うだろう。

そんな私の中の韓国は、結局は私のイメージだ。もしかしたら私の中の韓国は実際の韓国とは違うのかもしれない。しかし、私はその独特な赤い色彩の、血のうねるような生命力と情熱の国を感じている。架空の逃避行を飛び出して、高校では言葉を学び、短期留学として現地を歩いたからだ。たった一度の経験では、正確なことは言えないかもしれないが、ただ韓国と向き合うことができた高校での経験は私の大切な宝だ。それは誰にも犯すことは許されない私の心のままの故郷ともいえるかもしれない。そしてこれから多くを学んで行くうちに、さらに私の中の異国・韓国は姿を少しずつ変え、私にエナジーを囁き、私の紀行文の源になるはずだ。

韓国。それは「最も近くて最も遠い国」ではないと私は思う。私はそれを、「最も知ったつもりでいて最も知らない国」なのではないだろうかと思う。私もまた知ったふりをする一人であるかもしれないし、今この文を読む皆さんもそうかもしれない。私の夢はそうした私たちがより良く私の中のかけがえのない異国・韓国を知っていけるような活動をして行くことだ。私の未来はまだ始まってもない。だとしたら、まだ弱音を吐くには早すぎる。

では、私は韓国のために、または日本と韓国のためになにができるのだろうか。私の中の異国が、私の夢になった3年前から私の世界は広がり続けた。これからも私の世界は広がり続け、私はきっと私の中の異国・韓国と未来をつかって行こう。その道すがら、私が韓国や日本のためにできる最善の事柄を見つけられると信じている。

わたしにとって最高に魅力に溢れた国、韓国。ムクゲの花を胸に、その言葉の踊るようなリズム感と共に息づく赤い魂を私の力の源に、私は韓国と精いっぱい対話を続けたい。